

第 9 章 遅い小学生時代Ⅲ：1952 年夏 (15 歳)

初めての列車旅、アルジェへ

ケナドサの次は、ユーゴ先生の待つアルジェまで行かなければならない。アルジェまでは汽車の旅である。父は、私が都会育ちの子供のように世間慣れしていないことを心配して、モハメッド・エル・ブーアラウイ (Mohammed El-Boualaoui) さんという同行者を見つけて来た。彼もアウレフ出身で、ケナドサからモロッコのウジュダ (Oujda) へ行くとのことだった。父は私を頼むことが出来て安堵したようだった。この地域に敷かれた線路はレールの幅の狭いものだったが、コロン・ベシヤールを起点に、アイン・セフラ (Ain Sefra)、メシェリア (Méchéria)、サイーダ (Saïda) を経由してペレグー (Perrégeux) まで通じていた。ペレグーから北へは、線路が幅の広いものに代わるので、そこで列車を乗り換えなければならない。私は同行者のブーアラウイさんとペレグーで別れる手はずになっていた。モハメッドさんは西へ行く線の汽車に乗り換え、私はアルジェに直通する東行きの汽車に乗るのだ。私たちは前の方の車両に腰を落ち着けた。私は時々席を立てて前方の連結部へ行き、外の景色を眺めた。実に感慨深かった。ケナドサまでの、でこぼこ道をトラックの荷台で揺られた旅と、今始まったばかりの列車の、揺れの少なく快適な旅、二つのなんと違うことか。故郷のアウレフを生まれて初めて離れた私には、本当に劇的な変化だった。

汽車はアイン・セフラの駅に止まった。私は喉が渴いていたので、水飲み場で水を飲もうと汽車から降りた。周囲の全てのものが私には物珍しく興味を引かない物はなかった。ふと視線を上げると、軍帽のような帽子をかぶった男の人が、何か赤いプラカードを手にしてそれを左右に振っているのが目に入ったが、それに気をとられているうちに汽車が動き出した。私は自分の席がある前方の車両に乗らねばと全力で走り出したが、誰かが「無理だ、とりあえず一番近くのドアから乗れ！」と言うのが聞こえたので、そうすることにした。誰か乗客の一人が私の腕を掴んで引き揚げてくれたので、無事私は汽車に乗ることができた。「ラッキーだったね。でも、君の席まで行こうとしても、途中までしか通り抜けできないよ。」と、私を引き揚げてくれた男の人は教えてくれた。とりあえず、行けるところまで行ってみることにして歩き出した。

「おいおい、そっちじゃないよ、逆だ。」と、また同じ小父さんは教えてくれた。

私は正しい方向に向かい、2つか3つの車両を通り抜けたが、それ以上は進めなかった。確かに連結部のドアは鍵がかかっており、押しても引いてもびくともしなかった。すると、また別の乗客の一人が声をかけてくれた。

「まあ、座って静かに待ちなさい。鍵は車掌しか持っていないんだから。」

私は、ブーアラウイさんはさぞかし心配しているだろうと、気が気でなかった。次の停車駅で私はホームに飛び降り、ブーアラウイさんのいる車両へ駆けて行った。彼は私を見ると心底ほっとした顔をした。私は、なんと言って謝っていいか分からず、ただモジモジするばかりだった。モハメッドさんは、「ともかく君が無事でよかった。神様感謝します！」

と言った。

汽車は北へ向かってひた走り、景色には次第に緑が増えていった。そこにもここにも緑の木が茂っており、私は飽きることなく緑の沃野を眺め続けた。それは、サハラのどこまで行っても一面砂ばかりの世界と全くの対象をなしていた。車窓の風景は次から次へと流れて行き、線路が大きくカーブするところでは、窓から汽車の前と後ろの両端を見ることが出来た。列車はトイレや洗面所まで備えられており、長い長い車両の連なりは、まるで大きな蛇が大きな音を立ててうねっていく様を思わせた。私には全てが非常な驚きだった。私は以前見た映画のフィルムに、キャラバンのラクダがゆっくりと大地を渡っていくシーンがあったのを思い出した。同じ旅するのでも、この二つの方法はなんと違うのだろう。汽車はペレグーへ到着した。あちこちから大音量のアナウンスが聞こえた。全ての乗客はこの地で汽車を乗り換えなければならない。私は、ここまで同行してくれたブーアラウイさんに礼を言い、さよならの握手をした。彼は西へ、私は東へ。乗り換えた汽車は再びゆっくりと動き出した。



アルジェリア北部の緑の原野 (2005 年記者撮影)

首都アルジェの別世界

アルジェには翌日の正午ごろ到着した。アルジェ駅でとりあえず汽車から降りてはみたものの、私は右も左も分からなかった。ざわめき、人込み、あふれるような自動車、至る所での渋滞、信じられないくらいの混沌の世界だった。私は途方に暮れた。ユーゴ先生は、3 日前にアルジェに着いているはずだったが、先生の方では、その週の内に私がアルジェへ着くだろうということしか知らない。私は、不安で心臓が止まりそうだった。突然ユーゴ先生がこちらに向かって歩いて来るのが目に入った。不安の雲は一気に晴れ、その時の私の目には、ユーゴ先生が天から降臨した守護天使のように見えた。

私達は駅からタクシーに乗り、ホテルへ向かった。アルジェの街のなんと素晴らしいことか！私は左右に流れる、まるで太陽をさえ隠すかと思われる高層の建物を飽くことなく見つめ続けた。フロントでの受付が住むと、ユーゴ先生と一人の客室係が私を 3 階の部屋まで案内してくれた。長い螺旋階段を上ったのも、私には、その時が初めてだった。部屋に荷物を置くと、またすぐユーゴ先生たちは私を連れ出し、階下のレストランや各階の共同トイレを説明して回った。色々と覚えることがたくさんあって、なんだか試験を受けているような気分だった。

「君についていてあげたいのだが、他にちょっと用事があってそうもいかないんだ。」とユーゴ先生は言った。

「もし何か欲しいものがあつたら、客室係に言うんだよ。」と先生は付け加え、急ぎ足で出ていこうとしたが、急に何か思い出したとでも言う風に戻ってきて、

「どこか勝手に出かけたらしなくて、私が戻ってくるまでは部屋で休んでいなさい。いいね？」と私に命じた。

私は部屋へ戻り、改めて部屋の中を検分することにした。寝台にマットレス、ダンス、机…。まるで役所のオフィスみたいだった。ふと壁に付いたボタンのようなものに興味を引かれて、試しに私はそれを押してみた。ボタンは私が押すとへこみ、指を離すと元に戻った。おもしろくなって私はこれを何回も繰り返した。客室係が慌ててやってきて部屋のドアをロックした。私はドアを開けた。客室係は訊いた。

「御用は何ですか、お客様？」

「いや、別にありませんけど…」と私は応えた。

「このスイッチを何回も押しませんでしたか？」と彼は訊いた。

そんなやりとりをしていると、もう一人の客室係もやってきた。二人して私に説明した。このボタンは何か客室係に用がある時に押すものであると。この瞬間、私は心の底から、もはや自分はアウレフに居るのではないと理解した。この大都会では、くれぐれも自分の振る舞いに注意しなければならない。

そのうち私は生理現象に襲われて、トイレに行った。中にきれいな水を湛えた白く輝く洗面器のような物体、つまり便座であるが、これを見たのも私の人生ではこの時が初めてだった。しばし私は尿意をこらえ、どう用を足したらいいのか逡巡し、周囲を見渡した。ドアの内側に一枚の張り紙がしてあった。それには「トイレを出る前に紐を引いて水を流してください。」と書いてあった。私の右手には確かに紐がぶら下がっていた。そこで私は考え込んでしまった。私の故郷のアウレフでは、用を足す時は土の上にして、その後水で尻を洗うだけであるからだ。トイレを出る前、書かれている通りに紐を引くと、この世ならぬすさまじい音が起こった。私は何か壊してしまったのではないかと、すっかり動転して部屋へ駆け戻った。「何か壊れたとしても、僕のせいじゃない！」と私は必死でそう思おうとした。私は生きた心地がしなかったが、誰も何も言いに来なかった。便器の中に水が流れ込んできていたから、今頃はあふれて階下へ漏れているんじゃないだろうか？しかし、ホテルは静かだった。しばしの躊躇の後、私は状況を確認しに再びトイレへ行ってみるこ

とにした。しかし、トイレに何ら変わった所はなく、便器の中の水位も元と同じだった。私はもう一度紐を引き、今度は轟音が鳴りやむまで傍で見守り続けた。なるほど、こういうことか。私が何かへまをしたという訳ではないのだな。そして思った。ユーゴ先生も、こんなにアウレフと生活様式が違うのなら、事前にもっと色々教えてくれればよかったのに。



イメージ画像：アルジェのアラブ・西洋折衷のヴィラ。ハジ氏がお世話になった家庭もこんな風だったか。(2005 年記者撮影)

北部の全く違う生活

翌朝ユーゴ先生が再びホテルにやってきて、私をペレ (Peret) 夫妻の家へ連れて行ってくれた。夫妻の家は海沿いのフォル・デ・ロ (Fort de Lo) という所にあった。私はペレさんたちには既に会ったことがあった。ペレ氏はアウレフで気象観測技師をしていたのである。私はタクシーの後部座席でユーゴ先生の横に腰を落ち着けると、昨日ホテルで起きたことを小さな声で話した。何故かというところ、正直なところ、私は私が話すフランス語を他の人に聞かれたくなかったのである。ともかく、私はユーゴ先生に、アウレフと大きな違いがある事柄については前もって教えてほしいと頼んだ。先生も分かってくれたようだった。

ペレ夫妻は私を、とても暖かく迎えてくれた。夫妻の暖かさや親切さは今でも私の心に残っている。初め夫妻は、私とユーゴ先生をサロンに招き入れ、私がそれまで一度も見たことのない飲み物を出してくれた。ユーゴ先生は私に言った。

「さあ、ここからが本当にアウレフと違う生活のはじまりだよ。君はこの家に何日か泊ってもらって、フランス風の生活がどんなかをよく観察するんだ。例えば、食事の時のテー

ブルマナーとかね。ともかく他の人の振る舞いをよく真似するんだよ。」

確かに事前によく教えておいて欲しいと頼んだのは私だったが、こうしたユーゴ先生の言葉に私はちょっと当惑した。先生は続けた。

「テーブルマナーというのは、ナイフ、スプーン、フォークをどう使うかのことだよ。」ともあれ、最初に私が目玉が飛び出るほど驚いたのは、食事の時各人に別々の皿が配られることだった。それぞれの席の前には皿が配置されていて、皿の両脇にナイフ、スプーン、フォークが置かれ、皿の上にはナプキンが載っていた。それに皿の斜め向こうにはグラスもあった。覚えなければいけないことは沢山あった。食卓では、ペレ夫妻が対面して座り、私とユーゴ先生も向かい合わせに座った。皆まず膝の上にナプキンを広げた。私は不躰にじろじろ他の会食者を見るようなことはしなかったが、常に目の端で彼らの動きを見張っていた。食事は、全体的には、まあこれといったトラブルもなく進んで行った。が、あと少しで食事が終わるところで、今にして思えばなんとも恥ずかしい失敗を私はやらかしてしまった。食事の最後に、ペレさんの奥さんは各自に銀紙で包まれた三角形のチーズを配った。それが終わると奥さんは、フォークをパンの小片に刺し、皿に残ったソースをつけて食べた。私は同じようにしようと思い、チーズの包みにフォークを刺し、それを丸ごと口に入れた。咀嚼しながら、さすがに私も、これは何か違うと気付いたが、恥ずかしくてとても吐き出すことは出来なかった。私は必死の思いで飲み込んだが、食道がひっかかれるような不愉快な感覚を味わったのは言うまでもない。私は他の会食者の方を見るのが怖かった。

「まあ、紙ごと食べてしまったの?!」とペレ夫人が言った。

私はどうしていいかわからず、何も答えることが出来なかった。そこにユーゴ先生が割って入った。

「まあまあ、そういうこともあるさ。この子は洞窟から出て来たばかりなんだから。」

ユーゴ先生は、多分、この「洞窟」という語彙を私が理解できないと思って、そう言ったのに違いない。私は心の中で、まだ旅は始まったばかりだというのに、もうこんなでは、この先がどうなることやら、と思わずにいられなかった。この調子だと一体フランス本土では何が起ころのだろう? いっそのこと、ここで引き返してアウレフに戻る方がいいのではないか? しかし、他の声が囁いた。戻ってどうする? 卒業試験に受かりたくないのか? 卒業証書を手に入れることが、どれほどの名誉か分かっているのか?

翌日ペレ夫人は私にズボンを一着くれて、それまで私が穿いていた、アラブ風の仕立ての「サラオイ」と呼ぶズボンと着替えるように言った。新しいズボンには、きれいにアイロンがかかっていた。私はその夜新しいズボンを穿いたまま寝た。翌朝私を起こしに来たペレ夫人は、私のズボンがしわしわになっているのを見て、

「それを穿いたまま寝たの?」と聞いた。私は、そうだと答えた。

「パジャマは持っていないの?」

私はパジャマが何なのか分からなかったの、ちょっと言い淀んだが、持っていないと返事した。夫人は私にパジャマも一着くれて、こう教えてくれた。

「いい？今夜から昼間の服を着たまま寝てはだめよ。しわだらけの服で人前に出ることは、はしたないことよ。」私は、夫人に、よく分かりましたと言った。

それから数日後、私は再び独りで旅立ち、飛行機でトゥールーズへと向かった。ユーゴ先生は別に行かなければならないところがあるとかで、私とは一緒に来られなかった。